

目録 133

(別紙様式第3号)

論 文 要 旨

論 文 題 目

Homonymous Defect of Macular Vision in Ischemic Stroke




(虚血性脳卒中における同名性黄斑部視野障害)

氏 名 伊佐勝寛



視	野	障	害	が	多	い	と	一	般	的	に	考	え	ら	れ	て	い	る	。
し	か	し	、	本	研	究	で	は	同	名	性	黄	斑	部	視	野	障	害	が
黄	斑	部	回	避	を	伴	う	同	名	性	視	野	障	害	よ	り	も	頻	度
が	高	か	っ	た	。														
対	座	法	視	野	検	査	で	は	比	較	的	広	範	囲	な	視	野	障	
害	を	診	断	で	き	る	が	黄	斑	部	視	野	障	害	の	よ	う	な	限
局	し	た	視	野	障	害	を	指	摘	す	る	こ	と	は	困	難	で	あ	っ
た	。	こ	の	こ	と	は	、	同	名	性	黄	斑	部	視	野	障	害	が	見
過	ご	さ	れ	る	原	因	の	一	つ	と	考	え	ら	れ	る	。			
同	名	性	黄	斑	部	視	野	障	害	を	呈	し	た	い	ず	れ	の	症	
例	も	病	変	は	後	頭	極	に	限	局	し	て	い	な	か	っ	た	。	特
に	こ	の	内	の	4	症	例	は	鳥	距	皮	質	領	域	に	も	広	く	梗
塞	巢	が	広	が	っ	て	い	た	。	こ	の	こ	と	か	ら	、	中	心	部
視	野	を	担	っ	て	い	る	視	野	皮	質	領	域	は	従	来	考	え	ら
れ	た	領	域	よ	り	も	さ	ら	に	広	範	囲	で	あ	る	可	能	性	が
示	唆	さ	れ	る	。														
結	語																		
虚	血	性	脳	卒	中	に	起	因	す	る	同	名	性	黄	斑	部	視	野	
障	害	は	後	頭	極	を	含	ん	だ	さ	ら	に	大	き	な	領	域	で	も
発	生	し	、	必	ず	し	も	稀	で	は	な	い	。						

論文審査結果の要旨

報告番号	課程博 * 論文博	第 103 号	氏名	伊 佐 勝 憲
		平成 12 年 2 月 6 日		
論文審査委員	主査教授		吉井 興 志 彦	
	副査教授		澤口 昭一	
	副査教授		石田 肇	
(論 文 題 目)				
Homonymous Defect of Macular Vision in Ischemic Stroke				
(論文審査結果の要旨)				
1. 研究にいたる背景と目的				
<p>同名性黄斑部視野障害は両眼に同名性に出現する視野中心部の障害である。これまで同名性黄斑部視野障害は片側の後頭極に限局した小病変で発生し、虚血性脳卒中においてはまれと考えられていた (Symonds C et al. Brain 1957)。しかしながら同名性黄斑部視野障害の頻度および病巣を系統的に調べた報告はない。</p> <p>本研究は後大脳動脈領域梗塞における同名性黄斑部視野障害の出現頻度と梗塞範囲との関係を明らかにすることを目的としている。</p>				
2. 研究内容				
<p>1986年1月より1998年12月までに国立循環器病センターに後大脳動脈領域梗塞で入院した全96症例を調べた。96症例中、54症例でGoldmann視野検査が施行された。この54症例の脳梗塞病巣を頭部CTあるいはMRI検査を用いて調べた。</p> <p>54症例中、非同名性視野障害は11症例、黄斑部回避を伴った同名性半盲4症例、黄斑部回避を伴わない同名性半盲17症例、黄斑部回避を伴わない同名性1/4盲16症例、そして同名性黄斑部視野障害は6症例であった。同名性黄斑部視野障害を呈した6症例はいずれも読書や運転時の視野障害を訴えたが、対座法視野検査で正確に視野障害を診断することができず、後の</p>				

備考 1 用紙の規格はA4とし縦にして左横書きとすること。 (1)
 2 要旨は800字～1200字以内にまとめること。
 3 *印は記入しないこと。

Goldmann 視野検査ではじめて同名性黄斑部視野障害と診断された。同名性黄斑部視野障害を呈したいずれの症例も梗塞巣は後頭極に限局せず、鳥距皮質領域や近接する皮質下領域にも広範囲に拡がっていた。

虚血性脳卒中に伴う同名性黄斑部視野障害は従来まれとされたが、本研究では54症例中6症例(11.1%)に同視野障害が認められ、必ずしもまれでないことが示された。

その理由として本研究の結果から2つの点が指摘された。ひとつは対座法視野検査では黄斑部視野障害のような限局した視野障害が見過ごされやすいこと。もうひとつは、同名性黄斑部視野障害を呈する視野皮質の障害領域は従来考えられた後頭極には限局せずさらに広範囲であることである。

3. 研究成果と意義と学術的水準

本研究は虚血性脳卒中における同名性黄斑部視野障害は後頭極を含むさらに大きな領域でも生じ、必ずしも稀ではないことをはじめて証明した点で、意義がある。

現在、視覚視野領域における高次機能研究では患者対象研究のさらなる知見が望まれ、その点で本研究は重要である。

以上により、本研究成果は国際的に認められる水準にあり、学位授与に十分値すると判断した。